

令和 8 年度 異常気象分析検討会（第 1 回） 議事概要

1. 開催日時

令和 8 年 9 月 1 日（火）13：00～16：00

2. 開催場所

気象庁会議室 1（気象庁 7 階） 及び オンライン会議

3. 出席者

別紙のとおり

4. 議題

テーマ 1：西日本を中心とした令和 8 年 7 月中旬～8 月初めの顕著な高温と梅雨明け以降の顕著な少雨について

テーマ 2：過去あまり例のない経路となった台風第 15 号と令和 8 年 8 月千葉豪雨について

5. 配布資料

観測データ、再解析データ等から天候（台風や豪雨含む）の特徴と循環場の特徴

6. 検討結果の概要

配布資料及び報道発表資料を用いて検討を行った。委員からの主な意見は次のとおり。

○テーマ 1 に関わること

- ・ 今夏の極端な高温が、チベット高気圧の東方への張り出しに伴う、ユーラシア大陸から日本にかけての亜熱帯ジェットの北偏や、波列パターンの影響で日本付近の上空で高気圧が維持されたことは理解できたが、今後の課題として、これらをもたらしたエルニーニョとの関係を整理することが望ましいとの意見があった。
- ・ ユーラシア大陸から日本にかけての北偏した亜熱帯ジェットが、太平洋上で構造が変化したことで砕波が生じやすい状態となっていた可能性があるとの意見があった。
- ・ 6 月中旬頃から続くヨーロッパにおける猛暑と東アジアへの波列パターンとの

関連性について、より詳細に確認できるとよいとの意見があった。

- ・ 酷暑日のような極端な高温の要因については、大気循環場に加え、海面水温の寄与、下層雲の再現性とその寄与、さらには土壌水分の減少に伴う顕熱フラックスの変化による寄与を定量的に評価することが今後の課題になるとの意見があった。
- ・ 全球の海面水温の上昇による気温の底上げについては、その寄与の評価には慎重を要する。また、層厚換算温度の上昇が、例えば日本の気温をどの程度押し上げているのかを定量的に把握できれば、高温要因に関する説明の根拠がより明確になるとの意見があった。

○テーマ2に関わること

- ・ 茨城県に上陸した台風第15号の進路や、千葉豪雨にも影響した8月前半を中心とするモンスーンジャイアの形成には、エルニーニョ現象に伴う熱帯域の熱源応答に加え、北太平洋中緯度の海面水温が顕著に高く、その南で低かったことや、日本の東海上におけるロスビー波の碎波が寄与した可能性があるとの意見があった。
- ・ 千葉豪雨を対象としたイベント・アトリビューションの結果に対して、豪雨の停滞には複数の要因の微妙なバランスが関与しており、極端現象の再現性を評価する際には、平均的な変化だけでなく事例ごとのばらつきも示すのがよいとの意見があった。
- ・ 令和8年8月千葉豪雨について、関東平野に停滞した冷気が豪雨発生の一因であった可能性が指摘され、その形成に関わる降水域の位置や下層風場の予測の検証充実とともに、コールドプールやシアーラインの表現向上など、局地的豪雨に対する数値予報の改善につながれるとよいとの意見があった。

以上

令和8年度 異常気象分析検討会（第1回） 出席者

異常気象分析検討会 委員

（◎：会長、○会長代理、会長・会長代理以外は五十音順）

◎ 中村 尚	東京大学先端科学技術研究センター シニアリサーチフェロー
○ 渡部 雅浩	東京大学大気海洋研究所 教授 ※
植田 宏昭	筑波大学生命環境系 教授
榎本 剛	京都大学防災研究所 教授
谷本 陽一	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
坪木 和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授 ※
原田 やよい	気象研究所気候・環境研究部 第一研究室長
堀之内 武	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 ※
向川 均	京都大学 名誉教授 ※
(今田 由紀子)	東京大学大気海洋研究所 准教授 (は欠席)
(竹見 哲也)	京都大学防災研究所 教授 (は欠席)
(野中 正見)	海洋研究開発機構アプリケーションラボ 上席研究員 (は欠席)

異常気象分析作業部会 委員

川瀬 宏明	気象研究所応用気象研究部 第一研究室長 ※
-------	-----------------------

(敬称略、※印の委員はオンライン参加)

気象庁

大気海洋部
 部長
 業務課課長
 気象技術開発室長
 気象リスク対策課長
 気候変動対策推進室長
 アジア太平洋気象防災センター所長
 予報課長
 環境・海洋気象課海洋気象情報室長
 気候情報課長
 異常気象情報センター所長
 情報基盤部
 数値予報課長(代理:調査官)
 気象研究所

応用技術研究部 部長
台風・災害気象研究部 第二研究室長
台風・災害気象研究部 第四研究室長
気象大学校
関係官
その他関係官